

母性看護学における当事者参加授業学習効果

—双胎児を持つ夫婦の体験から学ぶハイリスク妊娠の理解—

森越美香* 伏見正江* 山下貴美子* 佐野千栄子**

要旨

母性看護学における当事者参加授業の学習効果として、女性の健康という側面から捉えた対象理解と、主体的に女性に添うケアリング学習の成立が確認されている。また、地域社会に生きる当事者の語りに共感し、その生き方から学ぶことによって学生は「人間」「社会」「看護の学習者」としての課題に気付き、地域社会の一員としての自覚と責任を再認識した上で育児支援などボランティア活動への積極的な行動につながることを期待できる。

当事者参加授業を導入して6年目となる2004年度は、双胎児を持つ夫婦が妊娠中から育児期にかけての体験を語った。近年、多胎児妊娠は増加傾向にあり、その特徴をふまえた看護ケアの重要性を認識し、ハイリスクな状況にある人のケアとその実際について学習を深める機会となるよう意図的に当事者を選択した。

研究方法は、学生が授業で学んだことの自由記述式レポートを用いて、各講座（領域）共通の分析内容であるKathleen B.Gabersonらの「学生に期待される学習効果」に基づく4側面（知識・技術・感情・価値観）と学生の課題認識を分類評価した。また、「ハイリスク妊娠」「双胎児」に関連する記述を抽出し学習内容を確認した。

今回の授業で期待する学習内容としてハイリスク妊娠についての理解を確認するとともに、看護の対象特性の理解に焦点をあてた意図的な当事者の選択に対する学習効果について検討し、以下のことが確認された。

1. 当事者の語りから、看護の対象者を統一体として捉えること、母性看護学ではライフサイクルの中の周産期を生きる女性として捉えることができる。
2. たくましく生きる当事者の語りは、人間の無限の可能性を感じさせる力を持っており、対象の力を引き出す援助の重要性を実感する機会となる。
3. 当事者参加授業は、看護の学習者として自己の課題を明確化すると共に社会性を育む機会となる。

（本研究は平成16年度山梨県立看護大学短期大学部共同研究費助成を受けて行われた全学的な「当事者参加授業」の実施と看護基礎教育における教育成果の確認の一部である。）

キーワード：母性看護学、当事者参加授業、ハイリスク妊娠、双胎児

I はじめに

本学の母性看護学は、母性看護学概論（30時間）、母性臨床看護論Ⅰ・Ⅱ（計75時間）で構成されている。当事者参加授業を受ける学生は、2年次前期に母性看護学概論でジェンダーの視点とリプロダクティブ・ヘルス／ライツを基盤に女性のライ

フサイクルを通した健康について学習している。その後、母性臨床看護論で女性のライフサイクルにおける性と生殖の身体的変化、心理・社会的側面の影響について学習する過程において、協力の得られた当事者の対象特性に応じて学習効果を最大限引き出せるよう調整した時期に当事者参加授

業を導入している。母性看護学における当事者参加授業の目的は、妊娠・分娩・育児を体験した母親（女性）の語りからケアリングを学ぶことである。母性看護学におけるケアリングは、女性自身が生き方や生活を変化させながら健康を獲得することを支援するための技術となる。したがって具体的な目標は、これまで女性が受け身であった医療のパターナリズムへの問題提示から女性を理解し、ライフサイクルにおける一人ひとりの女性の生活をアセスメントする力を養うことである。

地域社会に生きる当事者の語りに共感し、その生き方から学ぶことによって、学生は「人間」「社会」「看護の学習者」としての課題に気づき、地域社会の一員としての自覚と責任を再認識した上で育児支援などボランティア活動への積極的な行動につながることが期待できる。また、看護教育におけるヒューマンケアリングの重要性が認識されるようになって久しいが、教育方法としては臨地実習を中心としたケアリングの効果についての報告が多い^{1)～9)}。当事者参加授業は、学生にとって臨地実習に次ぐインパクトを持った体験学習であり、ケアリング学習に効果的な方法である。母性看護学での当事者参加授業の学習効果としては毎年検討を重ね、すでに女性の健康という側面から捉えた対象理解と、主体的に女性に添うケアリング学習効果について報告している¹⁰⁾。

当事者参加授業を導入して6年目となる2004年度は、双胎児を持つ夫婦が妊娠中から育児期にかけての体験を語った。近年、不妊治療の影響として多胎妊娠は増加傾向にある。多胎妊娠の特徴をふまえた看護ケアの重要性を認識し、ハイリスクな状況にある人のケアとその実際について学習を深める機会となるよう意図的に当事者を選択した。今回の授業で期待する学習内容として、ハイリスク妊娠についての理解を確認するとともに、看護の対象特性の理解に焦点をあてた意図的な当事者の選択に対する学習効果について検討したので報告する。

Ⅱ 倫理的配慮

1. 当事者への配慮

女性が自らの妊娠・分娩・育児体験を振り返って「語る」ことは、子どもを産んだことを受容し、女性として母親としての自己を客観的に見つめ直して自己肯定感を高めることによって育児生活をより有意義にする効果があるという点において、当事者側にも利益がある^{11)～13)}。また、当講座の教員は全員が豊富な臨床経験を持つ助産師であり、当事者である母親を助産師の視点からも支えることが可能である。

当事者は以前より教員と面識があり、授業の依頼を快諾してくれた。事前に文書を用いて当事者参加授業の目的や方法について説明し、その後数回の打ち合わせを行った。語りの内容は話しても差し支えない範囲内で良いことを保証し、当事者自身に選択してもらった。当事者の授業への不安や疑問にその都度対応し、リラックスして体験を語ることができるようサポートした。当事者参加授業の成果は個人が特定できないよう整理し、研究報告することを文書で説明し、同意を得た。

2. 学生への配慮

学生は「この授業で学んだこと」と「今後の自己の課題」の2つの視点で自由記載し、授業終了後提出した。記載された学生の学習内容はプライバシーに十分配慮し、研究としてまとめること、成績とは一切関係しないことを口頭で説明し、承諾を得た。

Ⅲ 「当事者参加授業」の実際

母性看護学において2004年度の当事者参加授業は、以下のような内容で実施した。

日時：2004年10月26日（火）10：40～12：10

実施場所：本学教室内

当事者：双子（1歳4ヶ月男児）を出産した母親とその夫

参加者：本学2年生98名と母性看護学講座教員4名

授業の展開：①導入（授業の進め方と当事者の紹介）

②当事者による体験の語り

③質疑応答・意見交換

④まとめ

当事者の語りの方：語りの中心は母親であった。パワーポイントによるスライド上映を併用し、妊娠・分娩・育児の体験を順に語り、夫はその都度父親としての心理や行動を補足した。スライドの内容は妊娠中の身体的変化、NICU（新生児集中治療室）入院中の新生児の様子、授乳中の様子、児の成長を追った写真などであった。

Ⅳ 結果

調査に協力が得られた学生98名（回収率100%）の調査票を分析対象とした。

1. 看護教育に期待される学習成果から見た学習内容

学生が「この授業で学んだこと」に記述した内容は、Kathleen B.Gabersonらの「看護実践教育に期待される学習成果」の4側面（知識・技術・感情・価値観）から1文脈単位で抽出し、類似する記述内容を集約してカテゴリー化した。1文脈を1カードとして合計1160枚のカードが抽出された。その内容は「知識」714枚（61.4%）、「技術」180枚（15.7%）、「感情」170枚（14.8%）、「価値観」96枚（8.2%）であった（図1）。

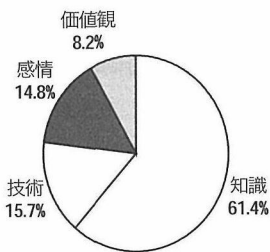


図1 看護教育に期待される学習効果から見た学習内容
n=98（複数回答）

期待される学習成果の4側面の中で最も多かった「知識」の側面には、＜心理＞＜育児＞＜妊娠＞＜医療・看護＞＜家族＞＜入院生活＞＜夫・父親＞＜分娩＞＜胎児・新生児＞＜マイナートラブル＞＜職場＞の11カテゴリーが抽出された。その中でも＜心理＞の学習内容は23.1%を占めており、周産期の女性の心理を捉えている内容が多か

った。学習した「心理」に関する項目を時期別に整理すると、妊娠期から育児期まで通して学習した内容が33.1%、妊娠期が27.0%、育児期が23.3%、分娩期が16.6%であった（図2）。

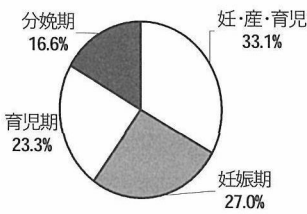


図2 「知識」カテゴリー心理における時期別学習内容（妊・産・育児期）
n=98

「技術に対する理念」の側面は＜教育・指導＞＜看護者の態度・姿勢＞＜心理的ケア＞の3カテゴリー、「感情」の側面では＜リアル体験＞＜妊娠・出産・育児への関心＞＜学習意欲＞＜当事者への思い＞の4カテゴリー、「価値観」の側面では＜夫・パートナー・家族＞＜ライフサイクルの中の周産期＞＜命＞＜セクシュアリティ＞＜社会＞の6カテゴリーが抽出された。各カテゴリーを構成しているサブカテゴリーは表1に示す。

ハイリスクな状況の理解に関連した「知識」に注目し学習内容をみると、＜心理＞では分娩期の喪失感、母子分離状況における心理、経済負担、＜育児＞では双子育児の工夫、双子の個性、＜妊娠＞では双胎妊娠リスク、妊娠の個性、＜入院生活＞では管理入院、＜分娩＞では帝王切開分娩、早産、母子分離状況、双胎分娩リスク、＜胎児・新生児＞では低出生体重児の受容や管理が抽出された。

また、母親の語りだけでなく夫婦で授業に参加してもらい、夫の存在感を示した結果として「知識」の側面における＜家族＞、＜夫・父親＞と、「価値観」の側面における＜夫・パートナー・家族＞についての内容が充実していた。これはハイリスクな状況にある人のソーシャルサポートの重要性が学習できたことを示している。

表1 2004年度母性看護学当事者参加授業における学生の学習内容

n=98 (複数回答)

	カテゴリー	サブカテゴリー
知識	心理	分娩期の喪失感、母子分離状況における心理、経済的負担、育児の工夫、育児不安、育児の個別性、妊娠のプレッシャー、ボディイメージの変調、妊娠期の期待と戸惑い、児と共にある成長、児とのエンパワメント、喜び・嬉しさ、親意識、サポートと安寧、コーピング
	育児	双子育児の工夫、双子の個別性、思考転換の工夫、虐待への影響、育児ストレス・不安、社会資源活用、育児支援、喜びと幸福感、親役割、経済への影響、精神的サポート
	妊娠	双胎妊娠リスク、妊娠の個別性、妊婦健康診査、ボディイメージの変化、精神的サポート、受容過程、不安
	医療・看護	医療従事者の態度・姿勢、当事者への影響、インフォームドコンセント、パターンナリズム
	家族	家族支援、親準備性、核家族支援への洞察、新しい家族成員、当事者周囲サポート力、夫婦の関係性
	入院生活	管理入院、人間関係、プライバシー
	夫・父親	支援、支持力、妻への理解者、妻との関係性、社会的役割、育児参加、役割の重要性、父親準備性、育児休業の現状、父親心理
	分娩	帝王切開分娩、早産、双胎分娩リスク、母子分離状況、医療・看護の介入、精神的サポート
	胎児・新生児	低出生体重児受容、低出生体重児管理、胎児との一体化、胎児感情、胎児成長
	マイナートラブル	妊娠に伴う身体症状、不快症状の精神面への影響
	職場	仕事と育児の両立
技術に対する 理念	教育・指導	自己選択・自己決定権の浸透、社会システム、育児支援、ライフサイクル、男女共同参画の浸透
	看護者の態度・姿勢	基本的知識・技術、医療改革への提言、当事者に添う姿勢、アセスメント、当事者理解、看護技術力、ケアリング
	心理的ケア	当事者理解、当事者との共有、精神的ケア、プライバシー、家族支援
感情	リアル体験	貴重・新鮮な体験、リアル体験、納得感、講義以上の有効性
	妊娠・出産・育児への関心	驚き、妊娠・出産・育児への関心、願望、羨望、感動、幸福感、自己への同一化、苦難・不安、生命の神秘性
	学習意欲	仕事に対する責任感、学習への向上感、将来の参考、家族への感謝・反省
	当事者への思い	関心、共感、羨望、感謝、賞賛、評価(指摘)、期待
価値観	夫・パートナー・家族	家族役割、家族力量性、パートナーシップ、受容、父性性の発達
	ライフサイクルの中の周産期	サポートの必要性、虐待、プラス思考、ライフイベント、マイペース、親意識の高揚、親性の発達、妊娠・分娩の満足
	命	生命の尊重
	セクシュアリティ	産める性、女性性の肯定、自己決定、羞恥心
	社会	支援機関、社会システムへの提言、虐待の背景、不妊への偏見、少子化への洞察

2. 当事者参加授業を受けた学生の「今後の自己の課題」

学生が「今後の自己の課題」について記述した内容から、①「看護」の学習者としての課題、②「人間」としての課題、③「社会」と関連した課題を抽出した。①「看護」の学習者としての課題を認識した学生の延べ人数は97名、②「人間」としての課題を認識した学生は36名、③「社会」と関連した課題を認識した学生は21名であった（図3）。

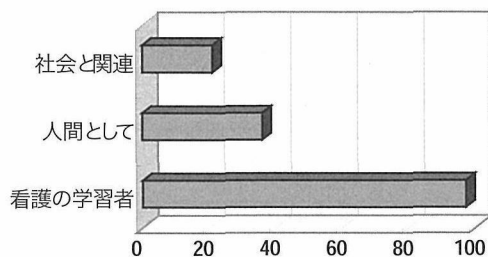


図3 自己の課題・3分類
n=98（複数回答）

学生が複数の課題を包含して認識することは森川¹⁴⁾によって確認されており、個々の学生の課題認識についても確認するため、7分類に整理した。単一の課題を認識した学生は52名で最も多く、①「看護」の学習者としての課題を認識した学生が51名（52.0%）、②「人間」としての課題を認識した学生が1名（1.0%）であり、全体の約半数の学生が「看護」の学習者としての単一の課題を認識していた。複数の課題を認識した学生は46名で、そのうち2つの課題を認識したのは36名（36.7%）であった。内訳は、「看護」の学習者と「人間」としての課題を認識した学生が25名、「看護」の学習者としてと「社会」と関連した課題を

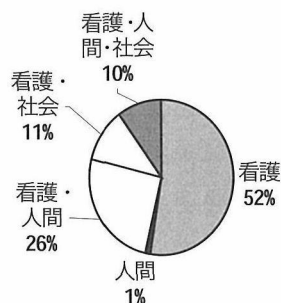


図4 自己の課題・7分類 n=98

認識した学生が11名と、いずれも「看護」の学習者としての課題に追加してもう1つの課題を認識した学生であった。3つの課題すべてを認識した学生は10名（10.2%）であり、約1割の学生が総合的に学習していた（図4）。

3. 授業を実施した当事者の効果

当事者参加授業に協力した母親から後日寄せられた感想は、本人の承諾を得て臨地実習オリエンテーション時に授業を受けた学生に伝えた。以下は感想の一部抜粋を示したものである。

【当事者からの感想】

（前文省略）

正直、当日を迎えるまでは、精神的にも時間的にも厳しいものがありましたが、引き受けさせていただいてよかったと思っています。

日々の慌ただしい生活の中で、これまでの自分の思いや育児についてじっくりと振り返る機会などありませんでしたので、今回の貴重な機会を与えていただいたことで、忘れかけていた初心を思い出し、それによって、また、新たな気持ちで育児に励む活力をいただいたような感じで、とても感謝しています。

自己主張も増え、だんだん扱いにくくなってきている子どもたちではありますが、お腹にいたときのことや無事産まれてきてくれたときのことを思い出すと、ますます愛おしく感じます。

（以下省略）

当事者は通常の生活には無い、授業の準備のための時間を割くという物理的な負担や、多くの学生を前にして自分自身の体験を語らなければならないという精神的プレッシャーがあった。しかし、それ以上に授業で語ることによって当事者が得るものは大きいことが示された。『自分の思いや育児についてじっくりと振り返る機会などありませんでした』と、妊娠中から分娩、育児に至る過程を、常に前だけを見て必死に駆け抜けてきた母親の気持ちが述べられており、そのことに母親自身が気付

くことができていた。さらに、授業準備や実際の授業で語る時間を経て、何度も自分の気持ちや育児をしている自分を振り返ることによって自分自身を再評価し、また、学生からの反応に勇気づけられ『新たな気持ちで育児に励む活力をいただいた』感じを持つ事ができたと述べていた。そして、自分の子ども達に対して『ますます愛おしく感じます』と愛着の強化を示していた。

V 考察

1. ハイリスクな状況にある人を生活から理解すること

本研究において看護教育に期待される学習成果から見た学習内容は、「知識」についての学習が6割と最も多く、ハイリスク妊娠に関する知識を得ることができたと考えられる。学生は生活体験や当事者（妊産褥婦や新生児）との接触が少ないことから、自ら創造的に看護の学習を進めていくことが難しい。しかし、当事者の迫力ある語りから、ハイリスクな状況にある人のケアと実際について知識を得ると同時に、「双子は2倍の喜びがあると話す姿が素敵だった」「育児三昧の日々を有意義に過ごしている」と双子の妊娠期から育児期の生き生きとした当事者の『生活』を学生は感じ取っていた。多胎妊娠は母体への影響も大きく、早産や妊娠高血圧症候群など妊娠中に異常が発生する危険が高い。そのため、通常の講義で取り上げられる多胎妊娠は『医学的な異常』として医療介入の視点から学習することが多い。しかし、同時に複数の子どもを育てていかなければならない母親にとっては『生活』であり、授乳や入浴といった日常の育児、母親の心理面においても生活上での専門家の助言や支援を必要としていることを忘れてはならない。当事者参加授業においては一人の女性の体験を通して、双胎妊娠に起こりやすい異常やその治療、分娩時のリスク、低出生体重児や母子分離など医学的な知識を確認すると同時に、その時々女性の心理状態を理解することに繋がっている。さらには、育児の当事者から実際の育児の工夫を紹介されることによって、具体的に様々な双胎児の育児方法を知る機会となり、個別

性に応じた育児方法の提供が重要であると実感することができる考える。

今年度の当事者は育児期の女性とそのパートナーであり、妊娠中から現在に至る体験を経時的に語った。そのことにより、学生は一人の女性を通して周産期に起こる様々な出来事を一連の流れとして捉え、学習することができた。これは「知識」のカテゴリーにおける＜心理＞の学習内容が各期に渡っている事からも確認できる。この経験は、学生が通常の講義内容を統合する上でも重要である。各期に分断しがちな知識は、当事者との関わりを通してリアリティある具現化された知識として学生に浸透すると考えられる。

また、女性のパートナーが当事者として語ることで、学生は夫や父親の行動や心理を学ぶことができた。夫婦での語りは夫（父親）の存在感が強調され、「家族で育てる」ことや家族力量についての理解が深まると考えられる。語る女性と共に学生の目の前にいる夫の存在感と、語る女性を支持する夫の態度を肌で感じることから、「子どもを産み育てる」ことは女性一人で負うことではないことを実感する。女性が、夫や家族をはじめとした様々な人々に支えられながら母親役割を遂行し成長していく過程を、語りの中の女性の心理を学生が共に感じ、一喜一憂しながら疑似体験することによって理解を深めていくのである。

看護の対象を「妊婦」「産婦」という細切れの各期の生理的特徴や身体的変化のみに注目して捉えるのではなく、ライフサイクルの過程における周産期を生きる女性であるという、その人の個人的な継ぎ目のない歴史から統一体として捉えることによって、その人に必要な個性のある看護ケアが提供できると考える。パースィ¹⁵⁾は統一体として人間観を「人間が－健康を－生きる」ことであると説明している。当事者参加授業を通して学生の学びは、まさに当事者を統一体として捉えることの重要性に気付いていたと考えられる。

2. たくましく生きる当事者の力から学ぶ

当事者参加授業において、学生は『無知の姿勢』（教えてもらうという立場での旺盛で純粋な好奇心）で当事者に臨み、当事者は生き生きと自身の

体験を『外在化』して（問題そのものを自身の外部に位置付けて）語る。それらの『ナラティブな関係』（語りを中心とした相互に理解しあう関係）によって、学生は価値観を伴った学びと同僚性もたらされ、当事者においては参加活動体験や自己効力感が自己受容を助ける。このような当事者との相互関係を通した学生の学習効果は、多角的、複合的要素を持ち合わせている。

今回の当事者から語られた2人の子どもたちに同時に授乳する“ダブル授乳”の写真などインパクトのある媒体を使つてのエピソードは、学生に親の強さや人間の無限の可能性を感じさせた。「親の強さ、たくましさと共に子どもの存在の大きさを感じた」「育児に対する姿勢がかっこいい」「中途半端な気持ちでは親になれない。命を育てるという気持ちが大切だ」と、たくましく生きる親の力を感じ、弱い存在ではないと気付くことによって対象の力を引き出す援助の重要性を考える機会となる。疾患を持つ患者の看護を学習する中で、問題解決型の思考が身についてしまった学生にとって、母性看護学で求められるウェルネス志向型の看護診断を困難に感じる場合が多い。臨地実習において双胎妊娠のケースを受け持つことも少なくないが、医学的に異常であると考えが故に、看護の対象者（受持ちケース）は何もできない弱者として捉えられてしまい、看護者（学生）からの一方的な管理や指導を計画してしまいがちである。しかし、当事者参加授業によって親の力を感じることは、看護の対象者の主体性を尊重することに繋がり、対象の持っている力を引き出す看護介入が必要であることを理解する上で重要であると考ええる。

より健康な状態へ成長していく積極的なプロセスを考えるというウェルネスの考え方を理解することは、母性看護学だけでなく、すべての領域の看護を実践していく上で重要な役割をはたすものである¹⁶⁾。ハイリスクな状況にある人も一方的に管理される状況にある人ではなく、主体的により良い方向へ行動することができる人であるという意識を持って臨地実習に臨むことが可能になると考える。

当事者参加授業によって自己の課題を認識することは、看護の学習者としてだけでなく人間や社会と関連して自己を意識することである。中西ら¹⁷⁾は、ニーズを持ったとき、人は誰でも当事者になる。ニーズに応じて、人は誰でも当事者になる可能性を持っていると述べている。学生は当事者の生活や社会的背景をふまえた対象理解を通じて、自分自身の当事者性を無意識に感じることも推測される。地域や生活の場に目を向け、ボランティア等の社会活動へ積極的に参加するなど、学生の社会性に大きく影響することが示唆される。生活体験に乏しく、社会性が身に付いていないと指摘される現代の若者にとって、当事者参加授業によって自己の課題を明確化し、社会性を育むことは看護を学習していく上での基礎となると考える。

3. 子どもを生み育てる女性が当事者として語ること

母性看護において、母親になる女性の主体的体験を理解して援助することの重要性をルービン¹⁸⁾は指摘している。また、母親が主体的体験を語ることは、出産体験による喪失感に対して癒しの効果があると言われている。

女性が妊娠し、お産を乗り越えてからの毎日は、日々の育児に忙しく、立ち止まって自分自身を振り返る余裕さえ持つことを許されない。育児に一生懸命になればなるほど、家庭の中に閉じこもり、社会から隔離されてしまったかのような錯覚さえ覚える緊張と孤独の連続は自己肯定感や自己効力感を低下させ、育児不安など精神的負担を増加させてしまう。それらの問題の解決方法として子育てサークルをつくり、子育て中の母親同士の交流をはかることが実践されてきた。一方、当事者参加授業で学生に体験を語ることによって、10～20代の学生から母親の行動や思いに共感やプラスの反応を受けることは、育児を担う次世代との交流が成立することになる。今回の当事者参加授業でも、学生から「育児している姿がかっこいい、素敵だった」と羨望のまなざしを受けることによって、自分の母親としての姿勢が次世代からも支持されていることが伝わり、自己肯定感の向上に繋がるということが推測される。一方、学生は看護の対象

者としての女性というだけでなく、生き活きと育児する母親を将来子どもを産み育てる学生自身の育児モデルとしても受けとめることになる。このような世代間交流の社会的役割としての意味も大きいと考える。女性にとって違う世代からの支持的評価がいかに精神的支えとなり、育児中の社会的孤独感から抜け出す原動力となるか、また、将来子どもを産み育てる世代にとって、育児の当事者からの語りが自分自身の育児モデルを構築する上での重要な刺激となるか、語り手と聴き手双方の効果を期待したい。

Ⅵ まとめ

2004年度の母性看護学における当事者参加授業には、双胎児を出産した母親とその夫を招いた。近年、多胎妊娠は増加傾向にあり、その特徴をふまえた看護ケアの重要性を認識し、ハイリスクな状況にある人のケアと実際について学習を深める機会となることを期待した。当事者参加授業は多胎妊娠の知識の習得と同時に、看護の対象者を生活や社会的背景をふまえた1人の女性として理解すること、また、対象の持つ力を引き出すというウェルネス志向型の考え方を実感する機会となることがわかった。

今回の当事者参加授業では、以下の3点が確認された。

1. 当事者の語りから、看護の対象者を統一体として捉えること、母性看護学ではライフサイクルの中の周産期を生きる女性として捉えることができる。
2. たくましく生きる当事者の語りは、人間の無限の可能性を感じさせる力を持っており、対象の力を引き出す援助の重要性を実感する機会となる。
3. 当事者参加授業は、看護の学習者として自己の課題を明確化すると共に社会性を育む機会となる。

学習内容を考慮した意図的な当事者の選択は知識の習得以上の効果があることが示唆された。今後は、本授業に関連したボランティア活動による学習の発展についても調査し、継続的で総合的な

ウィメンズ・ヘルスケアを考慮した母性看護学の学習方法構築へ向けて取り組んでいきたいと考える。また、当事者にとって授業で語ることの意味を再確認し、当事者の利益も最大限考慮した授業展開に向けて、発展させていきたい。

謝辞

当事者参加授業の研究にあたり、当事者参加授業を快く引き受けていただきました当事者の方々と、すべての学生に心から感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) Kathleen B. Gaberson、勝原裕美子監訳：臨地実習のストラテジー、医学書院、2002。
- 2) Em Olivia Bevis Jean Watson、安酸史子監訳：ケアリングカリキュラム 看護教育の新しいパラダイム、医学書院、1999。
- 3) 佐藤幸子他：看護におけるケアリング概念の検討わが国におけるケアリングに関する研究の分析から、山形保健医療研究、7巻、41-48、2004。
- 4) 谷垣静子、松田明子他：看護実践におけるケアリング 教員は学生にケアリング教育できているのか学生の立場から見た臨地実習における教員のかかわりについて、Quality Nursing、9巻12号、10554-10559、2003。
- 5) 小田心火、大塚真理子他：課題レポートの分析による「フィールド体験学習」の学び、埼玉県立大学紀要、4巻、27-34、2003。
- 6) 中柳美恵子他：看護学生の臨地実習におけるケアリング体験の意味づけ、日本看護学会論文集33回看護研究、24-26、2002。
- 7) 野並葉子：時代を超えて看護学教育で伝えたいもの ケアリングの視点から看護学実習 ケアリングの看護を体験する看護学実習、日本看護学教育学会誌、12巻3号、40-43、2003。
- 8) 安酸史子：時代を超えて看護学教育で伝えたいもの ケアリングの視点から看護学実習 看護学実習における教育方法論としてのケアリング、日本看護学教育学会誌、12巻3号、32-36、2003。
- 9) 齋藤勉：教育的ケアリングとは何か、日本看護学教育学会誌、12巻3号、21-29、2003。

- 10) 伏見正江ほか：思春期ヘルスプロモーションに関する研究、平成13年度山梨県立看護大学短期大学部共同研究費助成研究成果報告書、2002
- 11) 北川真理子他：出産の想起に関する研究－出産体験の振返りと母親のセルフ・エスティームの安定性について－、日本助産学会誌、Vol.14、No.3、90－91、2001.
- 12) 野澤美江子他：第3子出産に関する縦断的研究－出産後1ヶ月における母親の育児－、母性衛生、Vol.40、No.4、405－413、1999.
- 13) 平岡夫美子、雨宮博美他：ふりかえり場面における出産体験の経験化の援助、母性衛生、Vol.37、No.4、430－435、1996.
- 14) 森川三郎他：看護短期大学部における教育方法の改善－開発に関する研究 その2 当事者参加授業を発展させるための取り組み、平成15年度山梨県立看護大学短期大学部共同研究費研究成果報告書、2004.
- 15) Rosemarie Rizzo Parse、高橋照子監訳：パースィ看護理論 人間生成の現象学的探求、医学書院、2004.
- 16) 太田操：ウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程、医歯薬出版、2005.
- 17) 中西正司、上野千鶴子著：当事者主権 岩波新書860、岩波書店、2003.
- 18) Reva Rubin、新道幸恵訳：母性論 母性の主観的体験、医学書院、1997.
- 19) Valerian J. Derlega、齊藤勇監訳：人が心を開くとき・閉ざすとき 自己開示の心理学、金子書房、1999.
- 20) Benner,P./Wrubel,J.、難波卓志訳:The Primacy of Caring—Stress and Coping in Health and Illness—現象学的人間論と看護、医学書院、1999.
- 21) 井部俊子他：ベナー看護論—達人ナースの卓越性とパワー—、医学書院、1992.

Educational effects of maternal nursing lessons with active
participation concerned:
Understanding of high-risk pregnancy through talks of twins' parents

MORIKOSHI Mika FUSHIMI Masae YAMASHITA Kimiko SANO Chieko

ABSTRACT

Educational effects of participation of persons concerned in maternal nursing lessons on woman health and care are well established. The students are given an opportunity to talk with participants from local community, and learn about important topics such as "human", "community", "nursing student", "local community members and their responsibility", and finally take part in volunteer activities such as childcare.

In 2004, sixth year since lessons with active participation concerned were introduced in our maternal nursing education, the twins' parents were invited to talk about their pregnancy and childcare, because recently increasing number of multiple pregnancies in our country is accompanied by need for appropriate and specific nursing. In the lessons, first, the participants are introduced, and then mothers talked about their pregnancies and childcare, in a time course and by using slide shows. Their talks are supported by comments of their husbands on psychological aspects and specific activities required.

In the present study, the students were asked to write a free-format report concerning the lessons. Their understanding of the topic was evaluated by using four categories, i.e. knowledge, technique, emotions and sense of values, based on the report of Kathleen B. Gaberson et al, "Educational effects expected in nursing education". In addition, descriptions about "high risk pregnancy" and "twins" were extracted from the reports and separately subjected to a qualitative analysis.

Here we report on the educational effects of intentional selection of participating persons concerned for our lessons, by focusing on students' understanding of nursing approach that is required by high-risk pregnancies.

Keywords: Maternal nursing; Lesson with active participation; High risk pregnancy; Twins